

# 共有された半球を書く

——アジア＝オーストラリア小説の近年の動向——

アリソン・ブロイノウスキー／佐藤 渉（訳）

近年、アジア＝オーストラリア小説というジャンルは広く議論されてきました<sup>1)</sup>。今日の講演では、まずその展開を手短かに要約した後、新しい世代の作家を紹介しつつ2000年頃から見られるようになった傾向をお示ししたいと思います。結びとして、彼らの作品の興味深い点について触れます。

オーストラリア人はアジアの国々や人びとについて、多くの人が考えるよりもはるか以前からナラティヴを書いてきました。オーストラリアの各植民地が建設されてまもなく、新たに到来した人たちは周りにいるアジア人や、旅の途中で出会ったアジア人について書き始めました。しかし、こうした初期のフィクションに登場する「アジア」は現実とは似ても似つかないものでした。なぜなら、これらの表象は、オーストラリア作家の自己認識によるところが大きかったからです。彼らは、太古の大陸に築かれた新しい国に足を踏み入れ、未知の環境に身をおくことになりました。イギリス植民地であった19世紀のオーストラリアは、多文化社会の原型でもありました。金鉱や新たな機会に惹きつけられ、イギリス人とは異なるアイデンティティと世界観を持つ人びとが多くの国から押し寄せてきました[オーストラリアでは1850年代に金鉱が発見され、ゴールドラッシュに沸いた]。中には母国に強い帰属意識を持ち、その結果、アジアは奇妙で不気味な存在だと考える人たちもいました。フィクション作家たちもその中に含まれるでしょう。あるいは、オーストラリアがアジア太平洋地域に新たな帝国を獲得することを予期して、物資に恵まれたアジアの魅力を強調する人たちもいました。さらに、アジアの悠久の文化が西洋の影響とひとつになり、新しくより豊かなオーストラリア文明が生まれることを望んでいる人たちもいました。こうした人びとはアジアの文化と精神性、そしてアジアによる啓蒙を追い求めたのです<sup>2)</sup>。

連邦が結成された後も、戦争、貿易、旅行、移民といった20世紀の出来事に対応して、オーストラリア人はアジアの国々と人びとについて書き続けてきましたが、先に述べたような植民地時代以来のさまざまな自己認識は根強く残っていました。一方で憎悪と異質性を象徴する「アジア」に尻込みする作家もいれば、まるで神聖な文化の源泉であるかのようにアジアに没入していく作家もいました。アジアに関する初期の情報は、西洋の情報提供者やイギリスの出版社によって世界を巡った後、オーストラリアにもたらされました。徐々に直接の経験が増え、アジアに関する教育が向上するにつれ、フィクションの書き手は知識を増やし、アジアの言語に精通するまではいかないにせよ、直接の観察に基づいてアジアについてのナラティヴを書くことができるようになりました。1970年代以降、小説の登場人物たちは作者と同じことをするようになりました。つまり、多くはジャーナリストとして、あるいは短期間の調査任務で東北アジアや東南アジアの様々な国に赴任し、そこでしばしば人生を変えるような経験をします。未

熟な主人公たちがへまをやらかし、危機的状況をかろうじて逃れたりすることから、こうした作品は「ドロンゴ・ジャーノウ」(Drongo Journo; 愚かなジャーナリスト)小説と呼ばれるようになります。1980年代になると、アジアを旅する若いオーストラリア人旅行者の団が、もっとモダニズム的な、あるいはポストモダニズム的ですからあるストーリーを紡ぐようになります。中にはアジアの言語に通じた者も出てきます。彼らは、自由な生活様式、ドラッグ、ヘヴィメタル、さまざまなエピファニーなどを描きました。1960年代や70年代の使命に駆られた登場人物たちと較べると、これらの主人公はしばしば無目的で、明確な解決のないナラティブをさまようか、あるいは選択の余地のあるいくつかの結末を与えられました。

1990年代半ば以降、アジアからの移民が増加し、オーストラリアがアジアに「積極的に関与する」方針を公式に採用した結果、アジアを題材にしたオーストラリアのフィクションは劇的に変化しました。アジアは人気の題材で、多くの若い第一世代アジア系オーストラリア人が、英語あるいは母国の言葉を使って、初めてフィクションを書くようになりました。その多くは天安門事件が起きた時、オーストラリアで学生だった中国人でした。その他の人たち、あるいは彼らの両親は、ベトナムやカンボジアからの難民でした。その後、南アジア系オーストラリア作家が加わります。一方で日本、シンガポール、マレーシア、インドネシア、韓国といった国々出身の作家はあまり多くありませんでした。フィクション以外にも戯曲や詩、児童文学、映画の脚本を書く作家も多かったのですが、ここではとても扱いきれませんので割愛します。アメリカ合衆国やカナダのような他の移民社会のアジア系作家と同じように、当初、彼らは主にディアスポラの経験およびその苦痛と喜びについて書きました。それは、(ハンソン流の表現を使えば)ほとんどの「<sup>オーディナリ</sup>普通の」オーストラリア作家には太刀打ちできない経験でした[ポーリン・ハンソン。元下院議員。アジア系移民抑制を訴える極右政党ワン・ネーション党を創設]。また、こうした新しい作家は、アジアの言語、文化、伝統的な物語に関する直接の知識を持っていたため、「普通の」オーストラリア作家は対抗できませんでした。ひと握りの作家を除いて、「普通の」オーストラリア人はアジアについてフィクションを書くことをやめてしまいました。中にはクリストファー・コッシュヤリアン・ハーンのようにアジアについて書き続ける作家もいましたが、彼らは過去を扱うようになります。中国を扱うニコラス・ジョーズとリンダ・ジェヴァン、日本を扱うロジャー・パルヴァーズ、ダイアン・ハイブリッジ、パディ・オリリーなど、このジャンルに残った作家たちは、それぞれの国の言語と文化に精通しており、その強みを活かすことができたのです。

2000年代に入ると、もうひとつの急激な変化が生じました。その頃にはアジア人のディアスポラ経験はもはや目新しいものではなくなり、ハワード政権は政策としての多文化主義を放棄します。アジア金融危機の後、アジア経済に積極的に関与しようという熱意は冷めていきました。アジア言語教育やアジア研究は衰退するに任され、それと並行して、アジア=オーストラリア小説の出版と販売促進活動も下火になりました。「ディアスポラ作家」の中には、執筆をやめる者、作品を出版することができず他の仕事を見つける者、去って行く者もいました。今では文学賞の受賞リストやベストセラーリストに名を連ねるアジア系オーストラリア作家は減っています。ここからは、この変化を生き延びた作家のうち何人かを取り上げ、彼らの作品のどこが新しく興味深いのかを論じます。そして「普通の」オーストラリア作家が徐々にこのジャンルに戻り

つつあることにも触れたいと思います。

@@@

ブライアン・カストロは「普通の」オーストラリア人でもなければアジア人でもありません。あるいは「多文化主義作家」でもありません。彼は自分自身についても、そして彼の作中人物の多くについても、そうしたレッテル貼りを断固として拒否します。彼は「固定的なアイデンティティの押しつけ」が長年にわたって彼の想像力を窒息させてきたのだと述べています（カストロ 1999: 159）。中国とオーストラリアの関係を扱った先駆的作品 *Birds of Passage* (1983) に続くいくつかの作品は、中国を扱っていないか、オーストラリアを無視するかのいずれかでした。*Stepper* (1997) は、1940年代の上海と日本を舞台にしています。中国人男性が主人公である作品は、*After China* (1992) と *Shanghai Dancing* (2003) の二作品のみです。カストロは作品に多様な国籍の人びとを登場させます。そして、アジア系オーストラリア人についてはあえて「いわゆるアジア人」とか「アジアからきた人たち」と呼んでいます。オーストラリア知識人として生きることの限界に我慢しきれず、カストロは読者に考えろと迫るかのように国際的な学識を誇示します。彼は、執筆しながらモンテニューやジョイスやベケットが肩越しに覗き込んでいるのを感じると述べています。最新作の中編三部作には、それぞれに複雑な中毒と蒐集品と偽造品を抱えた三人の主人公が登場し、ポルトガル、マカオ、中国、オーストラリアを舞台にストーリーが展開します。彼らは作者と同じ思想世界に住み、作者同様グローバルな領域で活動します。しかしカストロにとってローカルはグローバルの対極ではありません。グローバルを示唆するものはローカルの中に存在します。オーストラリアのブッシュも然りで、カストロの作中人物はブッシュに還り、グローバルなものを発見します。

ウーヤン・ユーの場合、アイデンティティとのせめぎあいは異なる性質を持っています。彼は自分が「かつては中国人、常に半分中国人」であると述べています。多作な編集者、批評家、詩人、小説家であるユーは、すぐれた語学の才能と学者としての能力が中国でもオーストラリアでも十分に認められていないという不満を訴えて、「怒れる中国詩人」という評価を獲得してきました。あるいは、みずから自分に対してそうした評価を与えたのかもしれませんが。ユーは風刺をこめた辛辣な言葉をふたつの社会めがけて投げつけ、中国とオーストラリアのステレオタイプを内側からひっくり返してしまいます。彼は詩の中でメルボルンの退屈さと知的生活の欠落を非難していますが、彼の小説 *The Eastern Slope Chronicle* (2002) の主人公ダオも同じ問題に苦しみます。しかし中国を訪問したダオは、やはり同じように中国人の友人の偏狭さと無知を批判します。小説第二作 *The English Class* (2010) では、いっそう個性的な英語が使用され、ふたつの言語を響かせたごろ合わせもより多くみられます。主人公ジンの真の敵は英語です。彼はトラックの運転手から出発し、何とか英語を習得しようと永年格闘を続けますが、結局はオーストラリアにたどりつき、自分の闘いにはそれだけの価値がなかったのだと結論します。

ミシェル・ド・クレツァーはカストロ同様、フィクションへの興味を「ホーム」であるオー

オーストラリア、生まれ故郷であるスリランカのいずれにも限定しません。そして、なぜフィクションがどこかに「設定」されなければならないのかと問いかけます。彼女はイギリスの古典に親しんで育ち、フランス語を教えたこともあります。洗練された殺人ミステリー *The Hamilton Case* (2003) は、劇的な社会の変化を背景に、裕福で風変わりなスリランカの家族を三世代に渡って描きます。語り手が自己中心的な卑劣漢であることを明らかにすることによって、彼女は自分がアジア人に対して批判的である自由を持っていることを示します。すなわち「普通の」オーストラリア作家が持ちえない自由を。*The Lost Dog* (2007) の主人公は、メルボルンに住む孤独な英国系インド人（または男性）です。彼はカストロの *After China* (1992) に登場する建築家のように、もう一人の周縁化された人物—この小説では中国系オーストラリア女性—と恋愛関係を結びます。この本は、ド・クレツァーが「想像の帝国」と呼ぶ場所に息づき、姿を消した犬の搜索を推進力としながら「知覚の縁を超えたところにある驚異」を検証します。

パディ・オリリーはコピーライターおよび翻訳家として日本で働いてきました。短編集 *The End of the World* (2007) には、日本を舞台にした作品が二編収められています。語り手はいずれもオーストラリア人です。一人は“The Rules of Fishing”の日立市に住む大学院生の男。もう一人は“Women’s Trouble”に登場する、日本人と結婚し仙台に暮らすインド系の女性です。オリリーの若いオーストラリア人たちは、日本人は不可解であるとか、ずるがしこいといった判断を下すことなく、対立する慣習と微妙な礼節の網に絡め取られていきます。小説 *The Factory* (2005) の日本語を話す主人公ヒルダは、芸術家のコミュニティを調査するうちに同様の困難に直面します。そのコミュニティは1960年代に結成され、20年後に崩壊し、専制的な指導者によって再建される途上にあります。彼女は工房を内部から観察し、<sup>ファクトリー</sup>錯綜した愛と復讐と裏切りに巻き込まれますが、決して完全に内部の人間として認められることはありません。彼女は日本社会に参入しますが、まさにその社会の虜囚となるのです。

アリス・パングの処女小説 *Unpolished Gem* (2006) は「この物語は船の上では始まりません」という宣言で幕を開けます。この小説は、彼女のカンボジア系中国人の拡大家族が、フックレイとスプリングヴェイル [メルボルン郊外] でオーストラリア人になっていく過程の冒険を面白おかしく叙述しただけではなく、初めての学校、友人、恐怖、愛、喪失、成功といった彼女の個人的な「初めて」を語ったナラティブでもあります。この本のタイトルは、若い女性を貶めるカンボジアのことわざに由来しています。結婚市場でアリスは母親の信念にぶつかります。いわく、オージーは誰とでも寝る、中国人はギャンブラー、ベトナム人は浪費家、潮州人 [中国広東省東部の仙頭地区の出身者] は意地が悪い。それでも彼女は誰かと結婚しなければなりません。アリスの学校の友だちは、移民は同化しないと云います。「あの人たち、みんなでここにやってきてずっと仲間であっているのよ。英語も身につけようとしなさい」。そこで、アリスは潮州語を捨て、“bleeding obvious” (超当たり前) とか “bugger off” (ほっといてくれ、さっさと失せろ) のような表現を使うようになります。そうしているうちに、彼女の勤勉な家族は成功し、清潔で巨大な郊外の一軒家を手に入れることによってオーストラリアの一部となります。それでも家族が彼らにとっての全世界であることに変わりはありません。「普通の」オース

トラリア人は未だに「彼らの視界の周辺に漂う『白い亡霊』」に過ぎません。2冊目の本 *Growing up in Australia* (2008) は、63人のアジア系オーストラリア人の短いナラティブを収録しています。最近オーストラリアに到着した家族もあれば、ゴールドラッシュの時代にやってきた家族もあります。そうした差はありますが、やはりこの本も初めての経験を集めたアンソロジーです。オーストラリア生まれの人たちもアジア系オーストラリア人であることに困難を感じている、とパングは言います。しかし普遍性はそこで終わり、ストーリーは書き手の出自同様、広い多様性を示しています。

ナム・リーの短編集の表題作はまさに船上で始まります。処女短編集 *The Boat* (2008) はヴェトナムからコロンビア、日本、イラン、ニューヨーク、そしてメルボルンと読者を世界中に連れて行きます。最初の短編“Love and Honour and Pity and Pride and Compassion and Sacrifice”の語り手は、アイオワに滞在して執筆に取り組んでいます。彼は「ヴェトナムのこと」を書くようにという助言に抵抗して、「大切なのは、他に誰ひとり書き得なかったことを書くことではなく、自分だけが書き得ることを書くことだ」と考えます。締め切り直前に父から戦争とミライ虐殺の話の聞き、彼は短編を書きます。しかし次の朝、父親は平然とその原稿を燃やしてしまいます。作中の短編は、息子を不当に扱う父親が罪の意識に苦しむ息子を訪問し、二人の間に一種の和解が成立するというストーリーの中に包み込まれています。リーは3歳でヴェトナムを離れ、両親とともにメルボルンに移住します。（アリス・パングと同じように）短期間、弁護士を務めたのち、フィクション作家に転向してすぐに成功を取めます。リーはもはやグローバル市民です。国籍という概念とは複雑な関係にあるそうですが、答えを迫られた場合には、オーストラリア人であると認めるそうです。

パトリック・アリントンの処女小説 *Figurehead* (2009) は、オーストラリア人の三流ジャーナリスト、テッド・ウィトルモアを道連れに過去を再訪し、1960年代から90年代にかけてのヴェトナムとカンボジアを横断します。しょっちゅう酔っ払い、締め切りを守らず、話をでっちあげ、危険を避けようとするテッドは、「ドロング」ジャーナリストの伝統に連なっています。それでも彼には書くことができるし、たまたま友達になった負け犬に力を貸すこともあります。それに、その地域を愛していてアデレードに帰るなんて嫌だと思っています。テッドが模範としているのはウェイリー・ボール（アリントン版ウィルフレッド・バーチェット）で、彼が敵陣の背後から送るレポートの向こうを張ろうとします[バーチェットはメルボルン出身のジャーナリスト。アジア地域の紛争取材で活躍]。テッドはキッシンジャー、カストロ、名を伏せられたボブ・ホーク[オーストラリア第23代首相]らと出会い、シハヌーク殿下とスカッシュをします。しかし彼は、しばしば間違った負け犬の頭を撫でます。たとえば彼は、健康おたくのマルクス主義者で、ボル・ポトに忠誠を誓い大量虐殺をほう助したネム・キリ（ドッチ、別名カン・ケク・イウがモデル）の命を助けます[カン・ケク・イウはボル・ポト政権下で拷問・処刑の行われたトゥール・スレン収容所の元所長]。それでも、なぜカンボジアの人びとが自分をひどく嫌うのか、彼には理解できません。

ピーター・ケアリーはニューヨーク在住で、滅多にアジアを扱うことはありません。小説 *Illywhacker* (1985) は、三世代にわたるオーストラリア人男性の視点から、オーストラリアの産業が日本によって乗っ取られる事態を描きます。ケアリーは *Wrong about Japan* (2004) を書くため、文字通り日本を再訪します。無知で傲慢な外国人を描いたソフィア・ Coppola 監督の映画、「ロスト・イン・トランスレーション」(2003) の伝統に連なりそうなメモワールです。著者は「本物の日本」を探し求めて息子チャーリーとともに東京に降り立ちますが、到着早々地図を無くしてしまいます。彼は手話でコミュニケーションをとったり、旅館の部屋が小さすぎると感じたり、歌舞伎を理解しなかったりします。チャーリーは若者らしく、日本の「カッコイイもの」について詳しく知っており、インターネットで事前に日本人の友人を見つけています。そんな息子をしぶしぶ受け入れ、ケアリーは完全に理解したとは言わないまでも、次第に漫画とアニメの価値を認めるようになります。やがて、彼が何度か日本に滞在したことがあること、かなりリサーチしていること、下町周辺の地理を知っていること、伝統的な刀工や現代建築家、それに一流の映画監督 [宮崎駿] に特権的に会うことができること、ガイドとして腕のいい通訳を雇っていることなどが徐々に明かされます。

マーリンダ・ボビスは舞踏家・詩人としてオーストラリアに移住し、やがて演劇とフィクションの分野に進出しました。この講演で取り上げている何人かの作家 (カストロ、ラザルー、アリントン) と同様、彼女は大学の創作科に学問の世界における自分の居場所を見つけます。彼女の作品は、平凡さとありふれたものの中に、とりわけ母国フィリピンの都市貧民に、儀礼と神秘性を発見します。小説第二作のタイトルで *The Solemn Lantern-maker* (2008) と呼ばれる10歳の少年は、窓目でクリスマスのランタンを作っています。父の死を目撃して以来、彼は口を利かなくなります。少年の名、ノウランド (Noland) は、家族の失われた小作地を思い起こさせます。あるとき、ブロンドのアメリカ人ジャーナリストが車から銃撃される事件が起こり、彼女を空から落ちてきた天使だと信じた少年は、彼女をスラムにかくまいます。対テロ戦争を背景にして、噂と偏見が渦巻き、犯罪と不正に満ちた風潮の中で、アメリカ軍関係者やフィリピンのTVコメンテーターは、スラムの住人たちを都合よく誘拐者に仕立て上げます。ノウランドと母親はかろうじて生き延びます。

シモン・ラザルーは1963年以來パースに住んでいます。しかし、彼女は小説の中でシンガポールを再訪し、オーストラリア人もアジア人もユーラシア人も等しく風刺します。彼女の小説は、人生を一変させるような困難によって試される個人を描き出します。そうした瞬間のひとつとして、*Sustenance* (2010) では、バリのエルスホエア・ホテルの宿泊客が全員人質になります。パース出身の料理人パーペチュアは、立て籠もっている哀れなイスラム教徒も含め、全員の心身に滋養を与えてやることになります。イスラム教徒の活動家は、パーペチュアの父とホテルを共同経営しているアメリカ人が犯した性犯罪に復讐することを望んでいます。この小説は、オーストラリア人とアメリカ人がみずからテロリズムを招き寄せたのだと示唆しています。

ゲイル・ジョーンズの小説第三作 *Dreams of Speaking* (2006) は、彼女が日本を扱った最初の小説

説です。若いオーストラリア人研究者アリス・ブラックは、近代が生み出したあらゆる装置に情熱を傾ける女性です。彼女はパリで、アレクサンダー・グレアム・ベルを調べているずっと年上のサカモト氏に出会います。輸送機関とコミュニケーション技術に寄せる共通の関心を軸に、二人は思いがけない友情を育みます。長崎にサカモト氏を訪ねたアリスは、爆弾をはじめ近代の発明品がもたらしうる大規模破壊に思い至ります。死を迎えようとしているサカモト氏が実は被爆者であることも分かります。アリスとサカモト氏はグローバルな個人です。日本を扱ったオーストラリア小説では初めて、電子メールによるコミュニケーションが頻繁に行われます。使用される言葉はすべて英語ではありますが。

ミゲル・シフーコもアジア＝オーストラリア小説のリストに加えてよいかもしれません。文学賞を受賞した処女小説 *Illustrado* [名家出身者] (2010) は、アデレードで創作を学んでいる時に執筆され、オーストラリアで出版されたのですから。しかしシフーコは、彼の小説の主人公や未完の原稿を残して死んだ作家（彼の原稿を主人公は探し求めている）同様、フィリピンの名家出身で、アメリカに住んでいます。「私たちが取り上げられる機会はありませんにも少ないので、言うべきことが山ほどある」とシフーコは言います。その言葉通り、フィリピンの歴史と政治を扱った複雑でポストモダン的なこの小説において、彼は実に多くのことを語っています。分節化されたナラティブはしばしばフィリピンへ舞い戻り、あまり裕福ではないフィリピン人の口から、個性的な英語で面白い逸話が語られます。

明らかに、アジア＝オーストラリア小説は死に絶えたわけではありません。時代とともに変容を遂げ、いっそう多様化したのです。最近の例をもっと多く取り上げることもできましたが、私が選んだ作品を通じて、「普通の」オーストラリア作家とアジア系オーストラリア作家が取り組んでいる主題と技法、このジャンルに活力を与えている多様な経験、そしてアジア＝オーストラリア小説の持つグローバルな射程をお示しすることができたのではないかと思います。今重要なのは、彼らの出生地や居住地ではなく、何を書くのかという彼らの選択です。

## 訳者注

本稿は2010年11月25日に立命館大学衣笠キャンパス創思館にて開催されたアリソン・プロイノウスキー公開講演会（ヴァナキュラー文化研究会、オーストラリア・ニュージーランド文学会共催）における講演を翻訳したものである。なお、訳者による補足は本文中[ ]で示す。

## 原注

- 1) 以下参照。Ien Ang and others (eds.), *Alter/Asians: Asian-Australian identities in art, media and popular culture*, Annandale, NSW: Pluto Press, 2000; Bruce Bennett and others (eds.), *Crossing Cultures: Essays on Literature and Culture of the Asia-Pacific*, London: Skoob Books, 1996; Bruce Bennett, *Homing In: Essays on Australian Literature and Selfhood*, Perth: API Network, 2006; Alison Broinowski, *The Yellow Lady: Australian Impressions of Asia*, Melbourne: Oxford University Press, 1996; Alison Broinowski, *About Face: Asian Accounts of Australia*, Melbourne: Scribe, 2003; Maryanne Dever, *Australia and Asia: Cultural Transactions*, Curzon Press: Richmond, Surrey, UK, 2007; Robert Dixon, *Writing the Colonial Adventure*:

- Race, Gender and Nation in Anglo-Australian Popular Fiction, 1875-1914*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995; Robin Gerster (ed.), *Hotel Asia: an anthology of Australian Literary Travelling to the 'East'*, Melbourne: Melbourne University Press, 1995; Helen Gilbert and others (eds.) *Diaspora: Negotiating Asian-Australia*, St Lucia, Q.: University of Queensland Press, 2000; Megumi Kato, *Narrating the Other: Australian literary perceptions of Japan*, Clayton, Vic.: Monash University Press, 2008; Tseen Khoo, *Banana Bending: Asian-Australian and Asian-Canadian Literatures*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 2003; Tseen Khoo (ed.), *Locating Asian Australian Cultures*, Oxford: Routledge, 2008; Jacqueline Lo and Helen Gilbert, *Performance and Cosmopolitics: Cross-cultural Transactions in Australasia* (Palgrave Macmillan, 2007; Wenche Ommundsen and Hazel Rowley, *From a Distance: Australia Writers and Cultural Displacement*, Geelong, Vic.: Deakin University Press, 1996; Wenche Ommundsen, (ed.) *Bastard Moon: Essays on Chinese-Australian Writing*, Kingsbury, Vic.: Otherland Literary Journal, no .7, 2001; Ouyang Yu, *Chinese in Australian Fiction 1888-1988*, New York: Cambria Press, 2008; David Walker, *Anxious Nation: Australia and the Rise of Asia 1850-1939*, St Lucia, Q.: University of Queensland Press, 1999;
- 2) Alison Broinowski, *The Yellow Lady: Australian Impressions of Asia*, Melbourne: Oxford University Press, 1996, p.3. 参照。

#### 引用文献

- Allington 2009 Patrick Allington, *Figurehead*, Melbourne: Black Inc.
- Bobis 2008 Merlinda Bobis, *The Solemn Lantern-maker*, Sydney: Pier 9.
- Carey 2005 Peter Carey, *Wrong About Japan*, New York: Knopf Doubleday.
- Castro 1983 Brian Castro, *Birds of Passage*, Sydney: Allen & Unwin.
- Castro 1992 Brian Castro, *After China*, Sydney: Allen & Unwin.
- Castro 1999 Brian Castro, *Looking for Estrellita*, St. Lucia, Q: University of Queensland Press.
- Castro 2003 Brian Castro, *Shanghai Dancing*, Artarmon, NSW: Giramondo.
- Castro 2009 Brian Castro, *The Bath Fugues*, Artarmon, NSW: Giramondo.
- De Kretser 2003 Michelle de Kretser, *The Hamilton Case*, Sydney: Random House.
- De Kretser 2007 Michelle de Kretser, *The Lost Dog*, Sydney: Allen & Unwin.
- Lazaroo 2010 Simone Lazaroo, *Sustenance*, Crawley, WA: University of Western Australia Press.
- Le 2008 Nam Le, *The Boat*, Camberwell, Vic., Penguin Hamish Hamilton.
- O'Reilly 2005 Paddy O'Reilly, *The Factory*, Melbourne: Australian Scholarly Publishing.
- O'Reilly 2007 Paddy O'Reilly, *The End of the World*, St. Lucia, Q.: University of Queensland Press.
- Ouyang 2002 Ouyang Yu, *The Eastern Slope Chronicle*, Blackheath, NSW: Brandl & Schlesinger.
- Ouyang 2010 Ouyang Yu, *The English Class*, Yarraville, Vic.: Transit Lounge Publishing.
- Ouyang 2010 Ouyang Yu, *The English Class*, Yarraville, Vic.: Transit Lounge Publishing.
- Pung 2006 Alice Pung, *Unpolished Gem*, Melbourne: Black Inc.
- Pung 2008 Alice Pung (ed.), *Growing Up Asian in Australia*, Melbourne: Black Inc.
- Syjuco 2010 Miguel Syjuco, *Ilustrado*, North Sydney: Random House Vintage.